

# 最近の五書研究を整理してみると\*

木幡 藤子

## 1 はじめに

表題について短く説明することによって、この論文が何をしようとしているかを明らかにすることから始めます。

「五書」というのは、ご存知のとおり創世記から申命記までの旧約聖書の最初の五つの書のことです。その五書ないしその一部に関する研究であれば、どんなテーマであっても五書研究であるのではなく、五書研究とは、五書がどのようにして今の形に出来上がってきたのかという五書成立の歴史、つまり五書生成をテーマとする研究、それと五書成立の歴史に関与したと想定される伝承や文書や編集などに関する研究に限定されています<sup>1)</sup>。

「最近」には二重の意味がこめられています。まず第一には、250年以上300年<sup>2)</sup>近い歴史のある五書研究の中での最近の20年ほどをさします。長い研究史をふり返って見ると、変化のない静かな時代というものも少ないのですが、しかしまたこの約20年のような激動の時代も多くありません。この20年ほどを区切るのは、五書研究が大きく揺れだしたのが1975年頃だからです<sup>3)</sup>。それに続く数年間に衝撃的な研究が矢継ぎ早に発表されたことは、記憶に新しいこと

です<sup>4)</sup>。しかしながら、さまざまな揺さぶりがこのようにひとつの時期にまとまって現れたからといって、研究の機が熟して、大きなうねりとなり、研究史の中に〈ひとつの〉明確な問題が解決を求めて浮かび上がってきたというわけではありません。それは、以下に見るように、このときの諸研究が問題にしていることが実に多様であることから明らかです。

次に「最近」の第二の意味です。最近中の最近とでも言うべきこの数年が、その20年ほどの中でそれ以前と区別されます。まず1985年以降それまでのように衝撃的な研究が続々出ることがなくなりました。それを反映して、五書研究のニュースとも言うべき、研究現状報告が1985年までに集中しており<sup>5)</sup>、その後では短いものがひとつ目に留まるぐらいです<sup>6)</sup>。そして、後で見ると、この最近中の最近では、混乱の初期と違って、五書研究の基本的な問題において、あるはっきりした方向が出てきているのが確認できるのです。

この二重の意味での最近の五書研究において、それまで通説であったものを揺るがす研究がいろいろな方向からなされてきましたが、以下において、それらは五書研究のどの問題に関わるものであったのかを問い、そしてそれらはどういう理由から退けられることになったのか、あるいは受け入れられることになったのかをさらに問うていきます。それをするために、まず何が五書研究で問題になるかを明らかにしなければなりません。

## 2 五書研究の全体像

モーセが五書全体を書いたのではないということが一般的に認めら

れて初めて、では五書はいったいどのようにして出来上がってきたのかという問いが生じ、五書研究が始まりました。具体的な手掛かりとなった主なものは、神の名ないし神を表すのにヤハウエとエローヒームの二つがあるということ、つまり神名の交替、そしてひとつのことについて異なって二度物語られている、つまり叙述の重複という事実です。まずこれらを問題と感ずるかどうかが問われます。それがAの表の(1)です。もし、そんなものはない、あるいはこれらのことが多少あっても、話はすんなりと、矛盾なく読めると言うのであれば(2)以下に進む必要はありません。もし問題と感ずるなら、ではそれらの問題をどう説明するか。そのために以下のことが考え出されるのです。このように五書研究では、テキストに確認できる事実があり、そしてそれを問題に感ずるという判断があって、それを説明するために仮説が考え出され、その仮説が、五書成立の歴史をさまざまに描き出すのです。五書研究の出発点であった神名の交替と叙述の重複は、もちろん単純に機械的に使いうる基準ではありませんが<sup>7)</sup>、今日でもこれらをどう説明するかということをめぐる議論が重ねられるのですから、五書研究の究極の問題でもあります。その説明のために今まで考えられてきた仮説以外の全く新しい可能性が、将来出てくるかもしれないので(2)(c)の後ろに……が置かれています。

#### A 五書研究で問題になる事柄

- (1) 五書ないしあるテキストが問題なく、ひとまとまりとして読めるか、それとも読めないか。
- (2) 読めないなら、何によってその複雑さ、問題点が生まれたのか。

- (a) さまざまな材料とひとりの作者によるのか、それとも
- (b) さまざまな材料をまとめたものと、二つの文書層によるのか、それとも
- (c) 三つ以上の文書層に分けられるのか、それとも
- ⋮
- ⋮
- (3) その、ないしそれらの文書層は何なのか。
  - (a) かつて独立したひとつないし複数の文書だったのか、それとも、
  - (b) 手を加えた層 (Bearbeitungsschicht) なのか、それとも
  - (c) あるものは独立した文書であり、あるものは手を加えた層なのか。
- (4) その結果、文書資料と編集と加工のうち何と何が、それぞれいくつ仮定されることになるか。
  - (a) ひとつの文書資料と二つの加工なのか、それとも
  - (b) 二つの文書資料とひとつの編集と多分複数の加工なのか、それとも
  - (c) 三つの文書資料と二つの編集と多分複数の加工なのか。
- (5) 仮定されたものについての問題
  - (a) 範囲
  - (b) 成立過程
  - (c) 神学思想
  - (d) 成立の時と所
  - (e) 神学思想再考
- (6) その他の問題
  - (a) 文書資料間の関係

## (b) 申命記史家の作品との結合ないし編集

この表は、大きく(1)～(4)と(5)以下の二つに分かれます。前者は、何が仮定されることになるかという、〈存在〉をめぐる議論であり、後者はその結果仮定されたものについての〈具体的な問題〉です。前者では、四つの問いへの答えとして複数の選択肢があるので、それらは「それとも」でつながっており、後者ではそれがつかず、(a)以下の事柄が全て問題になります。この二区分に応じて以下において、3が(1)～(4)の問題を、そして4が(5)以下の問題を扱います。

この表から何が読み取れるかといえば、①まず五書問題はこのような多岐にわたる問題を含み複雑である。この表に挙がっている項目の数で、五書研究で問題になることが尽きるわけではありません。なぜなら(5)に挙げた項目は、(4)までの議論の結果仮定される、それぞれ複数あるかも知れない文書資料、編集、加工のひとつひとつで問われることだからです。このように問題点が多いということは、意見の分かれる可能性がそれだけ多いということです。だから五書研究に対するひとつの批判として、300年近く研究が続けられていながら、未だにまとまった結論に至らないのは、そもそもこういう研究をすることがまちがっているなどと言われることがあります。これは五書研究というものの性格を知らない的外れな意見です<sup>8)</sup>。

②そしてそこで問題になることには順序(Ordnung)があるということ。(1)～(5)の中では議論を順にたどって先に進むので、順序があるのは当然ですが、それだけでなく(5)の中でも(a)～(e)の問題は、原則としてこの順で論じることの意味があるのは、後で

見るとおりです<sup>9)</sup>。初めに挙がっているものほど基礎的なもので、根幹にあたり、先に進むほど、先端というか末端というか、枝先です。だから激しく議論されていても、もしそれが先の方の問題でしたら、それは根幹の問題にまでさかのぼって、意見の対立を生むものではありませんし、逆に、小さな意見の相違でも、もしそれが基礎的な問題での相違でしたら、それ以下の問題に大きな影響を及ぼすことがあります。ただし、いずれの場合も、先の問題を論じるためには、それより基礎的な問題が全て解明されていなければならないというわけでもありません<sup>10)</sup>。

③ 問題を順に進めるというのは、仮定を積み重ねることですから、五書問題は仮説性が高いということになります。つまり五書研究で文書資料や編集が「ある」と言うとき、それは厳密には「あると想定される」ないし「あると仮定される」を意味しています。もし将来文書資料が考古学的に発掘されるようなことがあれば、そのとき初めて、単に「ある」と言えるようになるのです<sup>11)</sup>。

## B 五書研究と他の研究分野の相互関連

五書研究はこのように多岐にわたる問題を含み、内部において広がりを持つだけでなく、文献研究である五書研究は他の研究分野とも深く関連して、外にも広がりを見せます。五書成立の歴史をどう理解するかは、旧約学の他の分野に大きな影響を与え、また五書研究が他から影響を受けることもあります。

まず五書研究が歴史学に与える影響があります<sup>12)</sup>。五書の大部分の文書の時代を下げるということは、最近その傾向が強いのですが、それらを古い時代のことを知るための史料として使えないということを意味します。またイスラエルのエジプト滞在およびそこか

らの脱出の前に族長時代を置いたのは、ヤハウリストの創作であり、歴史的事実を反映するものでないという結論が五書研究で出されれば<sup>13)</sup>、初期イスラエル史像の書き直しがなされなければならないということになります。

次に宗教史との関連では、R.レントルフやE.ブルーム<sup>14)</sup>の新しい五書理解がすでにそのままR.アルベルツによる新しい宗教史の中にとり入れられ、当該部分の叙述の基礎となっています<sup>15)</sup>。

逆に五書研究が他の分野から大きな影響を受けた例を、伝承史研究の始まりに見ることができます。文書としての五書の成立の歴史以前に、口伝の伝承の歴史があったことが新たに認められるようになったのは、一方で、当時の五書研究が資料分けをどんどん細かく押し進めた結果、やたら多くの資料が想定されることになり、行き詰まりを見せていたのも事実ですが、考古学の発掘により多数の古代オリエントのテキストが発見され、それらが刊行されてみると旧約聖書との多くの共通点が見いだされ、古代イスラエルが古代オリエント世界の一部であることが確認されたからです<sup>16)</sup>。

### C 五書研究にたいする伝承の意義

Aに挙げた問題点は、文書としての五書の研究にかかわる事柄でした。この文書生成の歴史を、さらにどのような全体像の中の一部として位置づけるかという問題があります。それが伝承をどう考えるかということです。そしてこの問題が実は、書かれたものである文献をどう扱うかという姿勢に深くかかわるのです。

旧約聖書の中に今日痕跡が残っているよりはるかに多くの口伝伝承が、当時存在しており、しかも後の時代まで長く生き続けたと考えるかどうか<sup>17)</sup>、文献への基本姿勢を大きく左右します。今の旧

約聖書に残されているものが、当時存在していたものの全てであると暗黙のうちに前提すれば、二箇所以上に似た思想や表現が出てくると、それがかなり一般的なことなのか、ある一人の著者に固有なことなのか、それとも伝承によるのかなどと問わないで、すぐに一方が他方を書き写したなどと、文書としての依存関係だけを考えてしまうのです<sup>18)</sup>。

さらに文書資料の神学思想を問うとき、伝承と著者の意図が区別できれば、著者の神学思想を一層明確に把握することができます。

このように伝承の持つ意味は重大なのに、最近の研究の関心は、文書としての成立の問題に集中しており、基本姿勢として伝承の存在の可能性すら顧みられません。だから文書資料の材料を問うときにも、ほとんどの場合すでに書かれた材料を想定しています<sup>19)</sup>。しかしこのような最近の傾向にもかかわらず、「この世界は本を書く人とそれを書き写す人からだけ成り立っているのではない」というH.グンケルの言葉を<sup>20)</sup>、物書きである研究者は肝に銘じる必要があります。

#### D 基本的仮説と通説

Aの諸問題をめぐって多くの仮説が提出されてきましたが、それらは文書仮説、断片仮説、補充仮説の三基本仮説を、どの段階、つまり伝承の段階か文書の段階で、どのように結びつけるかによって生まれたものと解しえます。文書仮説(Urkundenhypothese)の文書とは、口伝ではなく書かれたものであるというだけでなく、長いひとつながりの文書を指します。それが材料として五書の中に編みこまれているという仮説です。なおこの名称の一部のUrkundenの語尾の-nは、ドイツ語で合成語が形成されるときにつなぎですから、

この名称から複数の文書が問題になっているとは言えません。断片仮説 (Fragmentenhypothese) は、つながりのないばらばらのもの、まさに断片からだけ成り立っているという仮説です。以上の二つの仮説は何が材料としてあったのかという問いに答えていたのですが、補充仮説 (Ergänzungshypothese) という名称は、直接にはどのようにして出来上がったかを示しています。しかし素材がなにであるかも前提しています。つまり、素材が断片ばかりなら、「結合」であるはずですが。「補充」なのでですから、長く続いている文書に補いがなされたのです。補われるものが、もうひとつの別の文書なのか、断片なのか、加筆なのか、それらの中の複数のものなのかなどについては、限定していません。

最近の20年より前に一応通説であったものは、口伝伝承においては、断片仮説であり、文書になってからは、文書仮説と補充仮説の組み合わせであると言えます。それをAの表でたどります。(1) はもちろん「読めない」です。(2) は (c) です。この文書層というのは、単数で言えば eine literarische Schicht です。(2) での文書層は、それが五書のテキストに確認されるということにして、その前史はまだ問題になっていません。(3) は (a) で、ここの文書は、Urkunde の意味で、長いひとつながりの文書であったという前史を問うています。ここですぐ文書資料と言わないのは、文書が文書資料になるのは、編集者によって、新しい作品の材料のひとつとして用いられて初めて資料という性格を帯びるからです。最初から文書資料と呼んだのでは、編集者によって使われることがすでに決まっています、それを見越して、書かれたように響きます。かつてひとつの文書として存在していたということを指して「独立の」文書と言います<sup>21)</sup>。そして(4) では (c) となります。その三つの文書資料が、

ヤハウリストとエローヒスト<sup>22)</sup>と祭司文書<sup>23)</sup>、この順で書かれたと想定されます。それらが二度の編集を経て五書とされた。古い方の編集、エローヒストをヤハウリストの中に入れこんだ編集者をエホヴィスト<sup>24)</sup>、そうして出来上がったものを祭司文書の中に入れこんだのを最終編集者<sup>25)</sup>と呼びます。三文書資料の中、かなりはっきりした特徴ある言語表現を示すことが多いのは、祭司文書です。これとは別の独特な言語が、五書において量は多くありませんが、見出せます。それは申命記ないし申命記史家の表現です。最後に編集と加工の用語上の区別について。複数の文書を結びつけた編集者も、編集作業の一環として文書資料に手を加えます。だから「編集的加工者」(der redaktionelle Bearbeiter)という言い方がされることがあります<sup>26)</sup>。しかしここでは、編集者が手を加えたものは編集と呼び、編集に関係なく手が加えられたものを加工と呼んで区別します。

### 3 「存在」をめぐる動向——五書成立史再構成の試み——

通説をいろいろな方面から揺るがした最近の五書研究が2のAの表のどの問題に関わるのか、そしてそれらの研究がどういう理由から退けられ、あるいは受け入れられたのかを以下で検討します。

#### A 文書資料の存在の否定

正典として研究する立場 (canonical approach) などは、五書を扱うときもテキストの今あるがままの形を問題にするので、本来成立史には立ち入りません<sup>27)</sup>。立ち入らないということは、その存在を否定するものではないでしょう。

### 1) R.N.ワイブレイ<sup>28)</sup>

彼は、五書のテキストに神名交替や叙述重複や文体の違いなどがあることを認めるので、表の(1)の問いに肯定で答えます。そして彼が提示する五書成立の歴史は極めて単純です。さまざまな材料があり、それをひとりの作者が使って作品を書き、一度に五書が出来上がったというもので、(2)-(a)です。ちなみにこの作者をワイブレイは前6世紀に位置づけます。材料として彼が仮定するのは、種類もさまざまに異なるばらばらなものであり、つながっている長い文書ではありません。

ワイブレイ説への反論として次のことが挙げられます。①神名交替と叙述重複がひとつのテキストの中に重なって確認される場合、それらの問題をこの単純な成立史で説明しきれないことは、J.A.エマートンが書評で、洪水物語を例にして論駁しているとおりで<sup>29)</sup>。②〈二〉種類の特徴ある表現が、五書の広い範囲のあちこちの箇所に通して見られます。この事実は、ばらばらの材料からはもちろんのこと、〈一人〉の作者からも説明がつきません。この事実を重点的に取り上げたのがブルームです。それでいて彼は興味深いことに、ワイブレイ同様、文書資料の存在を否定するという結論に至ります。それを次に取り上げます。

### 2) E.ブルーム(Blum)ら

ブルームの二つの研究は、大著ながら執筆時期が連続しているだけでなく<sup>30)</sup>、同じ方法を族長物語に続いて出エジプト記と民数記においてくり返したものです。さらにこの二書は、レントルフ<sup>31)</sup>の問題関心および研究方法を継承したもので、基本線はレントルフ以来変わっていません。これはCh.レヴィンも指摘しているとおりで<sup>32)</sup>。だからここでは両者をまとめて扱い、その代表として一番新しい

Studien zur Komposition des Pentateuch を取り上げます。

ブルームの方法ですが、彼はまず同じ語 (Wort)、表現 (Ausdruck)、言い回し (Formulierung, Wortlaut) がどのような分布で出てくるかを調べ、言語表現上どこどこが対応するかを確認します<sup>33)</sup>。そしてそれらがドラマとしてどのように作り上げられているかという方向に解釈して<sup>34)</sup>、ドラマのような構成 (Komposition) があることを結論として引き出します<sup>35)</sup>。ブルームによれば、そのような構成が五書の中に二つ見られます。これは、大まかに言えば、先に通説の所で触れた、それぞれに特徴ある言語表現を示す、申命記ないし申命記史家の流れによる部分と祭司文書に当たります。だから二つの構成はKDとKPと呼ばれます<sup>36)</sup>。

再構成される五書の成立史の骨組みと、その意味することは次のようなものです。長い文書が初めて出来たのは、ばらばらの伝承をつなぎ合わせて構成を作りだした第一のKompositionであるKDによってであり、それ以前には、つながりあるものは何もないと言われます。こうして古い文書の存在がまず否定されます。このKDに手を加え、新たな構成を作りだしたのがKPです。つまり通常祭司文書と呼ばれるものが、手を加えた層とされ、これによって、かつてひとつの独立した文書であるとの可能性が否定されます。こうして、いかなる長い文書も五書の材料として使われなかったということになります。

ワイブレイはすでに確認したように (2) (a) でしたが、レントルフ、ブルームは、(2) (b) と (3) (b) となります。この違いにもかかわらずこの二見解に共通なことは、五書の材料として、かつて独立に存在していた文書をひとつも想定しないということです。つまり文書仮説の否定です。だから彼らは、それまでの五書研究をまさに

根幹から揺るがしたのです。それに較べれば、この激動の20年間に発表された他のセンセーショナルな研究の場合、少なくともひとつの文書資料を考えますので<sup>37)</sup>、それらの研究が通説にむけた批判も、五書研究の根幹のこんな深い所にまで及んでいないのは明らかです。

文書仮説の全面否定という大胆な結論を持つブルームの研究には次のような理由から同調できません<sup>38)</sup>。① 同じ言語表現の分布を調べるとき、すでに次の研究段階のドラマ的構成を見出すということが眼中に入れられており、ドラマ的構成に結びつかないものが顧みられていません。その結果、共通の語や表現などが十分に洗い出されていないのです。これが致命的な欠陥です。KDより古い段階において、文書としてのつながりを示す語や表現があることが、最近再確認されました。その研究にはこの後ですぐ立ち入ります<sup>39)</sup>。② ブルームは対応ということばかり指摘し、矛盾や食い違いが無視されているのでないかという疑問が生まれます。事実テキストを問題のないひとまとまりとして読むために彼は無理をしていると、私は出エジプト記3章で判断します<sup>40)</sup>。③ ブルームは神名交替や叙述重複をもとにして、文献批判をし、文書層ないし文書資料に分けることを拒否します<sup>41)</sup>。だとすれば祭司文書層、彼の言うKPの存在を何から導き出すのかという根拠を示さなければならないはずです。しかしそれをしないでいて、どこが祭司文書層に属するか研究史上驚くほど一致が見られるからという理由で、従来の研究結果を用いているのです<sup>42)</sup>。つまりそれが導き出された論拠を否定しながらこんな事をするという自己矛盾に陥っています<sup>43)</sup>。

最後にレントルフ、ブルームにおける「伝承」の意味について。彼らの再構成する成立史において、第一のKomposition 以前に存在

していたのは、ばらばらの伝承だけであり、長い文書などなかったと言われます。ここでは文書資料の否定として伝承が持ち出されるだけで、KD以前にどのような伝承がどう生きつづけ、どんな変化の歴史をたどったのか等、伝承そのものへの関心はありません。だから研究の題の中に、レントルフでは伝承が入っているのに、後のブルームでは、この語が消えてしまうのです<sup>44)</sup>。

## B 変質した文書資料

文書資料の存在を否定はしないものの、従来とかなり違ったものとして把握されていることがあります。その例として少し古いF.V. ウィネットの1965年の論文<sup>45)</sup>を取り上げます。

創世記を主な対象にして、話の構造と年代を問うたこの研究は、五書成立の歴史を次のように再構成します。まず、祭儀で語り伝えられていたアブラハム物語とヤコブ物語を内容とする古い方のヤハウイストの文書 (document) と呼ばれるものがあり、それをエローヒストが改訂し、そのとき同時に自分のヨセフ物語を加えた。そうして出来たものに今度は、新しい方のヤハウイストが、口伝や書かれた伝承を収集して書いた太古史を加え、ヨセフ物語に手を加えた。さらに祭司文書がそれを改訂し、創世記で補い、出エジプト記と民数記を加えて五書が出来たと<sup>46)</sup>。

この説では、ヤハウイストという名称は残っているものの、その内実は大きく変化しています。大きな変化はまず、ヤハウイストを二つに分割したことであり、それによって長いつながりのある話である文書でなくなっています。さらに、ヤハウイストなる者が何をしたかも大いに変わっています。つまり、古い方のヤハウイストの話とは、祭儀で物語られていたことを単に記録したもの (document)

であり、そこには素材を用いながら作品を書く著者の姿はありません。そして後の方のヤハウイストは、一部作品を書きはするが、改訂し、付け加える者、つまり加工者です。そしてヤハウイスト以外のエローヒストも祭司文書もそれと同じく、大きな補いをする加工者とされています。

この成立史の大枠はJ・ファン・セーテルスに引き継がれて行きます<sup>47)</sup>。両者の再構成する成立史は先の2Aの表においては、ヤハウイストという名称があるので、一応(4)(a)ということになります。しかし出発点にある文書が極めて短いものなので、むしろワイブレイやブルームらの言うばらばらの素材のひとつと解することもできるでしょう。

### C 文書資料ヤハウイストの再確認

レントルフ、ブルーム、さらに見方によってはウィネットらによっても抹殺されてしまったヤハウイストに、再び生命の息を吹き込んだのはレヴィンです<sup>48)</sup>。これは、最近の研究としては珍しく、五書というか四書全体を扱っています<sup>49)</sup>。この事は、五書研究の上でなんと言っても強みです。しかし研究対象が広範囲であるということによって、次のような弱点が生まれていることも否めません。① テクストの分析がかなり雑な場合があり<sup>50)</sup>、したがってそこから導き出される結論が説得的でない。② 新しい参考文献が抜けている<sup>51)</sup>のは仕方ないとしても、古くてしかも基本的な注解書が取り上げられていないことがあり<sup>52)</sup>、それが①の原因のひとつにもなっています。

さて、レヴィンの研究の方法ですが<sup>53)</sup>、①ある箇所、で、伝承などの素材と、それに手を加えた筆を区別する。そのさい研究史上、

ヤハウリストの内部で二つの層に分けられることがあったのを<sup>54)</sup>、再利用し、大まかに言えば素材とヤハウリストによる加筆に割り振ります。②そしてその加筆による表現、思想が他の箇所にも見られることを確認します。①と②があちこちの箇所で作られている(Querverbindungen)がわかり、ひとつながりの文書が五書の材料としてあったと想定されることとなります。以上のことから結論として、ヤハウリストは編集者であるということが導き出されます。この場合の編集とは、さまざまな材料を用いて<sup>56)</sup>、それらに手を加えながら、全体を構成して、ひとつの作品を仕上げるといことで<sup>57)</sup>。こうしてヤハウリストがかつてひとつの独立した文書であったことが再確認されたのです。

文書資料の存在を支持する有力な根拠として、このいろいろな箇所の相互の結びつきがあることは、すでに以前から指摘されてきました<sup>58)</sup>。レヴィンの研究の新しさは、それをテーマにして、ヤハウリスト研究全体を構築したことです。

ここで、五書研究のことを少しご存知の方なら、ヤハウリストに特徴的な言語などないのでないかと、疑問を持たれるでしょう。実際、かなり目立った、独特の言語を示すのは、先に言いましたように、祭司文書と申命記史家の流れを汲む部分です。しかし詳しく検討しますと、ヤハウリストが好んで用いる表現をかなりの程度確認することができます。そのことを、H.ホルツィンガーがすでに19世紀末に丹念に実例を集めて、示しています<sup>59)</sup>。

レヴィンは、ヤハウリストは明確な神学を持ったひとつの文書であったという結論を出します。こう言えば伝統的な理解であるかのように響きますが、ヤハウリストの神学と時代についての彼の見解

は、後で述べるように<sup>60)</sup>、従来のものと大きく異なります。なおレヴィンは祭司文書について独立した文書だったと想定するので<sup>61)</sup>、五書成立史としては、先の表で(4)(b)となります。

こうしてまず、ヤハウィストは五書の資料として使われる以前にひとつの文書であったという仮定の蓋然性が高いという結論になります。もうひとつの大きな文書層の場合はどうでしょうか。

#### D 祭司文書の独立性への回帰

研究史上最近になるまで、ヤハウィストの文書の存在を否定する人はほとんどいなかったのにたいし、祭司文書については、独立した文書であったということを否定する人は、以前からいましたし<sup>62)</sup>、最近でもいます<sup>63)</sup>。その場合、通常祭司文書は、エホヴィストの作品に手を加えた層とされ、(3)(c)となります。だから問題は、祭司文書として今日五書の中に含まれている部分は、かつてひとつの文書であったものが、文書資料として用いられたのか、それとも加工層なのかということです。

この問題については、ヤハウィストの場合のように、大きな新しい研究がなされてはいません。最近の動きとして、かつて独立した文書であったという仮説への支持を大物研究者が表明したということがあります<sup>64)</sup>。この動きを如実に反映しているのが、新しいものに非常に敏感なO.カイザーの意見の変化です。緒論(Einleitung)の第四版(1978年)と第五版(1984年)では、その頃の新しい研究に影響され、それまでの見解を変えて、最終的な判断は下していないものの、祭司文書が独立した文書であったことを否定し、加工層であるとの見解にはっきり傾いていました<sup>65)</sup>。ところが1991年のTREの「文学史」(Literaturgeschichte)の項目で、祭司文書が元来独立した

文書であったことを堅持するのが最も単純な仮説であろうと言って、祭司文書の文書としての独立性を支持する立場に戻っています<sup>66)</sup>。そして1992年の著書でもそうしています<sup>67)</sup>。そこに挙げられている理由は従来言われていたことであり、何ら新しいものはありません。だから祭司文書の場合は、論拠として新しい事柄が提出されて、以前の説が再確認されたのではなく、単なる回帰です。それ以後の新しい研究によっても、祭司文書の独立性への支持が表明されています<sup>68)</sup>。

祭司文書独立説の主な論拠を次にかいつまんで挙げます<sup>69)</sup>。①祭司文書が他の文書資料と組み合わせられている物語において、今のテキストで祭司文書とされる部分を取り出して続けると、ほとんどの場合ひとつながりの話として読める。②ある文書に手を加える人なら、その文書と矛盾するようなことを新たに加えたりしないだろうが、祭司文書にはヤハウィストと矛盾することが言われている(出6:2を創28:13と比較のこと)。③ある文書に手を加える人なら、重複になるようなことを、しかも重複することになる、前の記事との関係に一言も触れないで書き加えたりしないだろう。しかし祭司文書にはそういうものであるモーセの召命がある。

こうしてやはりふたつの文書資料が五書には含まれているということになり、表の(4)(b)まで来ました。もうひとつ問題が残っていて、それがエローヒストです。つまり表の(4)(c)まで行くかどうかです。

## E エローヒスト

エローヒストは、テキストの量が少なく、しかも断片的な場合が多いので、独立の文書であったことを疑う人が以前からいまし

た<sup>70)</sup>。この20年間でも扱いはさまざまで、ひとつの編集の層であるとされたり<sup>71)</sup>、あるいは一部はヤハウリストに吸収され、一部は後の付加とされて、全体としては解体されたりしています<sup>72)</sup>。これらの動きの中でごく最近カイザーが、エローヒストもひとつの独立した文書であったというのが最も納得のゆく仮説であると発言していることは注目に値します<sup>73)</sup>。

## F 編集と加工

文書を複数想定すると、当然それらを結びつけた編集者がいたことになるので、編集の存在は、文書の存在につながっています。だから編集のあるなしだけを独立に論じるということはありませんし、基本仮説のどれも編集者の存在を、異なる形においてではあっても考えていました<sup>74)</sup>。事実すでに前世紀の注解書において、複数の文書資料とともに複数の編集が登場しています<sup>75)</sup>。

複数の文書を結びつけた編集とはおそらく別の、もうひとつの編集が想定されます。それは、五書ないし四書と申命記史家の作品を結びつけたものです。この問題が存在することを五書研究者は誰でも知っていますが、扱いが難しいのと、機が熟していないので、本格的にはまだ手をつけていません。この編集のさいに、五書に手が加えられたかかもしれません。なぜなら、ヤハウリスト<sup>76)</sup>だけでなく祭司文書においても<sup>77)</sup>申命記・申命記史家的表現による加筆が確認できるからです。

さらにこれらの編集以外にも加工者がいたようです。ある箇所加工と他の箇所加工が同じ人によるのか、それとも別人によるのか、もし別人ならその時間的前後関係はどうなのか、あるいはある加工はある編集者によるのかという、編集と加工の関係の問題など

がありますが、まだ研究はあまり進んでいませんし、はっきりした結論を出すことができるほどの十分な証拠がないことが多いのが実情です。

このように五書成立の歴史は、複数の文書資料があり、それらを結びつけた編集者がおり、そうして出来上がった五書に、あるいはそれ以前の段階で手を加えた加工者がいるという具合に、極めて多層的でかつ複雑なものです。そのことを五書研究はいま改めて認識しつつあると言えるでしょう<sup>78)</sup>。

#### G 用語と名称の混乱

五書成立史の図が複雑になったのに伴い、従来の用語、名称では事態に対応しきれず、一部に混乱が生じています。それが特に編集に関して起こっているのは、そこでの変化が大きかったからでしょう。

エホヴィストの作品と祭司文書をひとつにした編集を従来最終編集 (Endredaktion) と呼んでいました。しかし最近これが次の理由から適切でないということが分かってきました。①この編集より後でも手が加えられたらしく、それを最終編集後の加工 (die nachendredaktionelle Bearbeitung/Überarbeitung) と言います。最終の後と言ったのでは、一種形容矛盾に響きます。②先に述べたように、五書と申命記史家の作品を結びつけた編集があるので、編集としても最終のものでないからです。だから、五書編集 (Pentateuchredaktor)<sup>79)</sup> という語が適切でしょう。さらにこの編集の略語として従来 R<sup>p</sup> が使われてきましたが<sup>80)</sup>、これでは祭司文書だけにかかわるような誤解を生みます<sup>81)</sup>。事柄を正確に表すには新しい表現が必要です<sup>82)</sup>。

次はエホヴィストについてです。これは先に述べたように、ヤハ  
ウィストとエローヒストというふたつの文書資料をまとめた編集者  
を意味していました。ところが、エローヒストを独立の文書と認め  
ない人でも、この語から出来た形容詞を使って、エホヴィストの話  
(der jehowistische Bericht) ということを行います<sup>83)</sup>。これは、ヤハ  
ウィストに加工がなされた形での話ということですが、ひとつの名称  
でありながら、意味することは以前と随分変わってしまっています。

五書をさして *das nachpriesterliche Geschichtswerk* という語が新し  
く使われています。この *nach* には時間的な「後」という意味と、  
その影響を強く受けているという二重の意味があります<sup>84)</sup>。さら  
に、五書の内容は多様だが、全体としては歴史作品であるというこ  
とを示します。そして五書と呼べば、申命記全体が入るような印象  
を与えますが、実際には34章の僅かの節だけなので<sup>85)</sup>、そのことを  
はっきりさせ、この歴史作品と申命記史家の歴史作品と名称の上で  
もパラレルに置き、それとの編集という先に述べた問題への道筋を  
つけるものでもあります。

#### 4 各文書や編集の具体的な諸問題

これまで見てきた文書や編集などの存在については、一応文書仮  
説の再確認という意味では、五書研究の大枠は、元に戻ったと言え  
るでしょう。それと対照的なのが、各文書や編集の具体的な諸問題  
の今の状況です。特に最近、新しい説が多く提出されているので  
す。それらに個別的に立ち入る前に、2Aの表の(5)に挙げた事柄  
の問題を一般的に指摘しておきます。

## A 2 Aの表の(5)について

表の(5)の(a)~(e)の事柄は、先にも触れたように、この順序で議論が進んでいきます。だから初めの問題で見解を異にすると、後はおのずと意見が分かれてしまいます。その例をレヴィンの研究にたいする判断で見ることになります<sup>86)</sup>。しかし後の問題の見方が変わっても、それは前の問題に影響しません<sup>87)</sup>。その例を研究史の中からひとつ拾います。祭司文書は長らく、五書の基礎となる文書で、年代的に一番古いものであると位置づけられていました。しかし実は逆に、文書資料の中で最も新しいものであるということが、1880年代に判明したのです<sup>88)</sup>。しかし祭司文書の範囲については、この大変化の前のTh. ネルデケの研究の結果が今日までほとんどそのまま受け入れられています<sup>89)</sup>。つまり、ある文書資料の年代(d)が変わっても、それは文書資料の範囲(a)に影響しないのです。

また前の問題を抜かして、後の問題に取り組むと、出てきた結論がしっかりしたものでなく、すぐに論駁されてしまうようなものでしかありません。その例としてすぐ後で(a)の範囲の所で取り上げるH.H. シュミードの研究を挙げることができます<sup>90)</sup>。

(a) 範囲とは、その文書資料に属するのは、どのテキストのどの部分かという問題です。つまりその文書資料の始めと終わりを決めるだけでなく、後からの付加を除き去り、もとの形を復元します。そしてある文書資料の範囲を決めるということは、同時に他の文書資料や編集や加工の範囲に影響します。なぜなら、全体の量が一定ですから、あるものが減れば、他のものが増えるという関係にあるからです。

この範囲の問題は基礎的で、それだけにそれのもたらす影響は甚大です。H.H. シュミードは、ヤハウイストを取り上げ、そこに申命

記史家の神学が見られる、したがってヤハウイストの時代は、当時の通説よりかなり後だと言うのです。この研究は出版された当時、そのセンセーショナルな結論のゆえに注目されました。しかし研究方法が重大な弱点を抱えています。それが土台をしっかり構築しないで、先の問題に取り組んだことによるのです。つまり彼は、ヤハウイストの作品の範囲について、土地取得の前までということ言うだけで<sup>91)</sup>、それ以上明確にせず、ただ何となく伝統的にヤハウイストとされる、つまり本の題にならって言えば、いわゆるヤハウイストのテキストに乗っかって、神学と時代を問うています。このように神学および年代の問題の前に、ヤハウイストの範囲を確定するためのテキストの分析をしていないのです。その事から、次のような弱点が生まれていることは、もうすでに度々指摘されてきました<sup>92)</sup>。つまりH.H.シュミードがヤハウイストとするテキストの中に後の時代のものが含まれているので、結論として提示されていることが、どこまでヤハウイストそのものにあてはまるか疑わしいのです。ちなみに、このH.H.シュミードの研究はヤハウイスト以外の文書層を対象から外しているので<sup>93)</sup>、五書成立史の枠に関しては何も発言していません。

(b) 成立過程ということは何を意味しているかと言えば、著者は一人なのか、それとも複数の人間のグループなのか、そして一気に書き上げられたものなのか、それとも長い時間をかけて、場合によっては数世代にわたって書き継がれたものなのかという問題です。最後に挙げた場合が書き継ぎ説(Fortschreibungstheorie)と呼ばれています。

(c) 文書資料や編集の神学思想についての研究結果が何によって違って来るかは、同じ対象を扱っても、どう解釈するかによって異

なりますが、とくに何を解釈するかによって異なってきます。だから先に述べたように、文書資料や編集の範囲をまず確定することが必要なのです。

文書資料の場合、もとの範囲が決まれば、それで全体の構成や、あるテキストがどのような前後関係にあるかなどが分かり、解釈の重要な手掛かりが与えられます。さらに文書の中に採用された素材と、文書の著者の筆を区別できれば、著者が素材をどのように解釈し直したかを知ることができ、その文書の神学思想をかなり精密に説明することができます。

(d) 文書成立の時と所の決定は、厄介なそして微妙な問題です。なぜなら、確かな論拠がないにもかかわらず、およそであっても具体的にいつどこでと言わなければならないからです。

確かな論拠がないのは、まず五書以外のところからの証拠がないことによります。先に述べたように、文書資料の存在を示す考古学での発掘はまだありません<sup>94)</sup>。また旧約聖書の中の五書以外の書との関係からも多くは期待できないというのが実情です。これはある文書資料のある箇所が五書以外で引用されているか、逆に五書以外のある箇所が五書の中に引用されていれば<sup>95)</sup>、時代決定の手掛かりが得られるというものです。それがごく僅かしかなく、しかもそれに基づいて大まかなことしか言えないのです。一例を挙げれば、創世記6章13節の言葉は有名なアモス書8章2節の「わが民イスラエルに終わりが来た」を前提しています<sup>96)</sup>。この関係確認から結論として出されるのは、創世記6章13節が祭司文書の一部なので、この文書はアモスより、つまり前8世紀半ばより後に位置づけられるということだけであって、それ以上にどれだけ後かなどは決められません。

そして、確かな論拠がないのは、なによりも文書資料の叙述の仕方によります。著者は自分の時代のことでなく、過去の歴史を物語っています。だから著者の時間と物語の時間が一致しません。それでも著者によっては自分の時代の問題を作品の中に持ち込んで、自分の時代について間接的に発言することがあります<sup>97)</sup>。しかしその場合でも、作品の中に著者の時代的な位置が直接明示されることはありません。

このような事情なので、五書研究に携わった人は誰でも知っているように<sup>98)</sup>、年代を正確に決定するための確かな論拠はないということを確認しておくことが重要です。文書資料や編集の時代決定の問題は、五書研究の永遠の課題と言えるでしょう。

しかしだからといって、時代決定をしなくてよいということにはなりません。なぜなら、テキストが言っている事、著者の思想は、それが、誰に、どんな状況の中で、どんな問題を持った人にむけて語られているかによって、それが持つ意味や、それがひき起こす働きが違って来るからです。

そこで、時代決定のための確かな論拠がないにもかかわらず決めなくてはならないのなら、この問題を扱うのにどういうことに注意しなければならないかという問いが生まれます。まず文書資料という作品の中でできるだけ内在的に、その物語を解釈するということをし尽くしてから<sup>99)</sup>、次にそうして確認された思想の時と所を探すという順序をとること。それも、よほど特殊なもので、特定の時と所を指し示すもの以外は禁欲的に扱い、できるだけ多面的に論じ、総合的に判断するということになります<sup>100)</sup>。それから、そのように設定された時と所において、今度は、著者はその時代のどの問題をとりあげ、それにどう答えようとしているかをもう一度問い、さ

らにその思想がどう受け取られ、どんな働きをしたかを問うということになります。だから(4)の後で(5)「神学思想再考」となっているのです。しかし時代決定の問題をどこまで解明できるかは、先に述べたような文書の著者の姿勢、自分の時代の問題をどの程度作品の中に持ち込むか、によってかなり異なると思われます。

## B ヤハウイスト

### 1) 範囲

ヤハウイストの作品の終わりに関しては以前から議論がなされてきました。創世記で族長に土地の約束が度々なされているのにもかかわらず、その実現について物語られていないのはおかしい。その問題に答えるためにM.ノートによって提出されたのが次のような仮説です。もともとヤハウイストは土地取得について語っていたが、祭司文書とひとつにされると、そちらの叙述がモーセの死の記事で終わっていたので、これ以後の部分は切り捨てられてしまったと<sup>101)</sup>。しかし、土地はヤハウイストのテーマではないということがまずH.W.ヴォルフによって確認されてから<sup>102)</sup>、流れが変わりました。創世記の土地の約束の言葉の多くは、ヤハウイストのものでなく、後からの加工、それも申命記史的加工ないし編集であることが判明してきました<sup>103)</sup>。だからヤハウイストはもともと後の方で土地取得について物語っていなかったのだという結論になります。

レヴィンの研究はヤハウイストの範囲を極めて縮小しています<sup>104)</sup>。例えば、エジプトの災禍物語はヤハウイストになく、砂漠時代もごく僅かなテキストだけが残されます。しかしレヴィンの分析をていねいに読んでも、災禍物語をヤハウイストのものでないとする積極的な理由は提示されておらず、説得力がありません<sup>105)</sup>。

レヴィンのように大幅にヤハウリストのテキストを減らすのは極端な例ですが、全体的傾向として、以前よりヤハウリストのテキストの量は減っています。それは編集や加工の量が増加しているからです<sup>106)</sup>。

## 2) 成立過程

先に触れた書き継ぎ説が、最近ヤハウリストについて二つの形で言われています。①太古史とかヨセフ物語などというかなり大きなまとまりが、数百年にわたって加えられていった<sup>107)</sup>。②それに較べれば、ずっと短い話や数節の言葉がヤハウリストのあちこちに散らばって、付け加えられていったのが見られる<sup>108)</sup>。

ヤハウリストに後から手が加わっていること、そしてその中のあるものには申命記・申命記史家的表現が使われていることが確認されます<sup>109)</sup>。しかしこのことから数百年にわたる書き継ぎ説が言えるか、次の理由から疑問です。つまりあちこちの加筆の相互の関係とその年代を決めるための十分な手掛かりを見出すことができない。したがって書き加えがヤハウリストの作品全体にわたって、幾層にもあると言えない。だから、むしろ加工ないし編集のさいの加筆であると判断されるべきでしょう。

成立過程においてもうひとつ問題になるのは、ヤハウリストの用いた材料です。これも最近登場した説ではありませんが、それが、すでに書かれたもので、それもかなり長いものであったと断定し、それを原ヤハウリスト (Protojahwist) と呼ぶことがあります<sup>110)</sup>。そして書かれた材料を想定することは、ヤハウリストの年代を下げることに連動する場合があります<sup>111)</sup>。しかしヤハウリストが、短い句以上に長い、ひとつの話の、文言が定まっている材料をそのまま自分の作品の中に採用したとは、次の理由から考えにくいです。

① ひとつの話の中で、今のテキストを材料部分とヤハウイストの加筆部分にきれいに線引きして分けることができない。② 書かれた長い材料を主張する研究を検討してみると、材料とされた部分の中に、ヤハウイストが好んで用いるという表現が出て来ているという奇妙な事実が確認される<sup>112)</sup>。

### 3) 神学思想

たびたび取り上げているレヴィンは、ヤハウイスト研究の結果、フォン・ラートが聞いたら驚くようなヤハウイストの神学を提示します。レヴィンによれば、ヤハウイストは神とイスラエルの間の距離というものを知らない。なぜならその作品においてイスラエルが神ヤハウエにたいし罪を犯したということは言われず、神によって滅ぼされるのはイスラエルに敵対するものばかりであるから。だからヤハウイストは民間宗教(Volksreligion)の神学者である<sup>113)</sup>。しかし、レヴィン説には次の理由から賛成できません。① 先に指摘したように、ヤハウイストの範囲の決め方に説得力がない。レヴィンが、今述べたような事を言えるひとつの理由は、砂漠時代のヤハウイストのテキストを大幅に削っているからです。② さらにヤハウイストのテキストの中で、材料とヤハウイストの加筆に分ける仕方、つまり何がヤハウイストによって新たに導入されたかをめぐる議論も、納得いくものではありません<sup>114)</sup>。私が出エジプト物語でしたテキスト分析と解釈では、むしろヤハウイストは、イスラエルの敵なら誰でも滅ぼす神というような神理解にたいし批判的です。海の奇跡でエジプト人とファラオが滅ぼされるという伝承の出来事に新しい意味を与え、彼らが滅ぼされたのは、神にくり返し語りかけられながら、それへの応答を誤ったことへの罰であると解釈し直しています<sup>115)</sup>。

#### 4) 成立の時と所

ヤハウイストの時代が、最近の五書研究において争点のひとつになりました<sup>116)</sup>。伝統的なダビデ・ソロモン時代から大きく時代を下げて、捕囚期、捕囚後に置くというさまざまな試みがなされました。しかし、そのさいヤハウイストの範囲は一致していませんし、理由もテキスト自身の分析<sup>117)</sup>、それに加えて古代オリエントの歴史的文化的背景やギリシアの歴史記述との関連<sup>118)</sup>、申命記史家との近さ<sup>119)</sup>とばらばらで、それらの理由が相互に補完し、まとまって、伝統的見解を覆すようにはなっていません<sup>120)</sup>。また各研究もそれぞれ固有の問題をかかえていて、説得力に欠けます<sup>121)</sup>。だから最近再びヤハウイストをダビデ、ソロモン時代に位置づけるという結論の学位論文が出版されました<sup>122)</sup>。しかしこれによっても問題の決着がついたわけでもないようです<sup>123)</sup>。したがって、今でも、ヤハウイストの時代について意見は次のように分かれています。①ダビデ・ソロモン時代<sup>124)</sup>、②捕囚後<sup>125)</sup>、③そして書き継ぎ説では10～7世紀ないし9～7/5世紀という長い期間にわたります<sup>126)</sup>。

祭司文書では、その時代の問題がいろいろな箇所へ滲み出ていて、それらがひとつの時代を指し示しています<sup>127)</sup>。それに較べると、ヤハウイストは先にも述べたように、自分の時代の問題を作品の中に持ち込む度合いが低く、ヤハウイストのこの基本的な姿勢のゆえにその歴史的位置を知ることが難しいのです<sup>128)</sup>。

以上ヤハウイストについての最近の研究を取り上げましたが、その中に、ヤハウイストの申命記史家化とでもまとめることのできる現象が見られることに気づかれたと思います。①神学思想が似ている。②時代的に近づける。③かなり長い時代にわたって書き

継がれるという成立過程の類似。④どちらも文書化した資料を集め、それに手を加え、全体の構成を作って、ひとつの作品を仕上げるといふ編集作業をした。

### C エローヒスト

ここでは、エローヒストをかつて独立に存在していた文書と再び見なすようになった、カイザーの、時と所についての見解を紹介するに止めます<sup>129)</sup>。時代は早くて王国時代末期、むしろ捕囚後の早い時期である。所は、時代設定に連動して北王国イスラエルでなく、創世記22章の舞台が密かにエルサレムを指しているので、ユダである。

### D 祭司文書

#### 1) 範囲

祭司文書の範囲は先に述べたように、ネルデケ以来あまり変化がなかったのですが、最近になって、終わりをめぐって新説が二つ出されています。通説は祭司文書は申命記34章のモーセの死の記事で終わるというものです。① ヨシユア記5章10節以下のギルガルで過越祭を祝い、翌日からその土地の産物を食べるようになると、マナがもう降らなくなったという記事も祭司文書に含まれていたといふ説をN.ローフィンクが再び提唱しています<sup>130)</sup>。しかしこの論文での祭司文書の範囲決定にはかなり問題があります。例えば、J.L.スカの当時の新しい論文<sup>131)</sup>に影響され、出エジプト記12章の過越の所も祭司文書でないとしています。この説は受け入れられません<sup>132)</sup>。② これとは逆に通説より早く祭司文書は終わっていたというもので、おそらく祭司文書にシナイより後の砂漠時代はな

く、シナイが祭司文書の頂点であり、同時に終わりである。これは祭司文書の解釈に重大な変化をもたらす可能性のある問題ですが、最近複数の研究が出たところなので、今後の検討課題です<sup>133)</sup>。

## 2) 成立過程

祭司文書が基礎文書(P)と後から加えられたもの(P<sup>g</sup>)から成り立っていることは一般に認められています<sup>134)</sup>。だから祭司文書全体はかなりの時間がかかってできたものです。

さらに問題として、P<sup>g</sup>がひとりの著者かそれとも複数の人間かということがあります。

## 3) 成立の時と所

P<sup>g</sup>を捕囚期に位置づけるという通説が最近の研究でも再確認されています<sup>135)</sup>。場所は捕囚の地バビロンというのが通説ですが、R.スメントは祭司の伝統を簡単に手に入れることのできる場所として、エルサレムを考えます<sup>136)</sup>。しかし、伝統、伝承はその担い手とともに動くものですし、エルサレムの住民であった祭司は捕囚に連れて行かれたのですから、こう考える必要はありません。

## 4) 神学思想

最近も祭司文書の神学について盛んに研究がなされていますが<sup>137)</sup>、それらに立ち入ることは紙幅の関係上できないので、ひとつだけ問題を指摘しておきます。祭司文書と、捕囚後のエルサレム教団とその祭儀、そして神政政治の理念との関連ということが言われますが<sup>138)</sup>、祭司文書の成立過程の、上に述べたどの段階でそれが確認できるのかを問わなくてはなりません。それを、歴史物語を主内容とするP<sup>g</sup>がすでに示すか疑問です。

## E 編集

編集で重要なことは、先に述べた存在の問題だけでなく、編集の仕事をどのようなものと想定するかということです。つまり編集者は単に結びつけることだけをしたのか、それとも結合しながら、できる所では、加筆して自分の思想を表現したのかという問題です。すでに前世紀の注解書で、テキストの中に複数の編集者の筆による部分が確定されているのですから<sup>139)</sup>、当時編集作業を、資料を結びつけることに限定していなかったのは明らかです。その後、五書研究の主な関心が文書資料に偏ったらしく、その時期の緒論では編集者の存在とその時代がごく短く扱われたようです<sup>140)</sup>。1970年代に入りやっとかつての編集者像が再び顧みられるようになり<sup>141)</sup>、それについての研究が今も続けられています。そして編集者によるとされるテキストの量が最近の研究では大幅に増えています<sup>142)</sup>。

## F 五書研究と新しい文学研究

五書研究に携わる人々の中で、新しい文学理論に基づく方法を提唱しているのは、レントルフやブルームです。前者はその分野の新しい研究叢書である *Biblical Interpretation* の編集者の一人です。そしてブルームは自分たちの聖書解釈に刺激を与えたものとして、ユダヤ教の伝統的解釈とならんで、新しい文学研究を挙げています。この二人は先に見たように五書研究の中でかなり根幹の所で別の道に進みますので、新しい方法が従来の研究にどう接続するかは問われず、むしろそれにとって代わるものとして位置づけられています。彼らより五書研究において伝統的な立場をとるA.シャルト<sup>143)</sup>も、従来の歴史的・批判的研究方法が行き詰まっているので新しい方法である現代言語学の方法を用いて、コミュニケーション理解の

モデルを自分の研究の基礎に据えると方法論のところで述べておきながら、それに続く釈義においてはほとんど実行していません<sup>144)</sup>。このような事情ですから、五書研究においては新しい文学理論に基づく方法が、従来の方法にどう接続し、どうそれを乗り越えて、どういう新しい成果を生み出すのかという具合に、方法が精密にされていくというふうにはなっていません。

かえって、新しい文学理論を論じることなく、その方面の研究を文献表に挙げもしない人が、新しい方法が問題にする、著者や編集者と読者の関係を問題にしています。先に取り上げたレヴィンは、ヤハウィストが自分の歴史理解を読者にも分かち持って欲しいとか、どういう表現手段を用いてどういう効果を読者にもたらそうとしているか等を問うています<sup>145)</sup>。しかしここではこれらの問題について方法論的考察、反省はなされていません。

\* この論文の一部について1993年11月20日の日本聖書学研究所公開講座で話しました。

## 注

- 1) ここで「モーセ五書」(die fünf Bücher Mose)と言わないのは、この表現を文字通りに取ると、五書の著者はモーセということであり、それによって、五書がいつ頃、誰によって書き記されたかという問題が片づいているので、五書がどのような過程を経て成立したのかという五書研究(PentateuchforschungないしPentateuchkritik)など存在しなくなるからです。だから「モーセ五書研究」というのは厳密には矛盾です。
- 2) 1711年のH.B.Witterと1753年のJ.Astrucの著作から数えての年数。本の題

は、大変長いので省略します。

- 3) この年にR.Rendtorff, *Der "Jahwist" als Theologe? Zum Dilemma der Pentateuchkritik*, Congress Volume Edinburgh (VTS 28), Leiden 1975, S.158-166 とJ.van Seters, *Abraham in History and Tradition*, Yale U. Press New Haven/London 1975 が出版されています。後者を以下で J.van Seters, *Abraham*と引用。
- 4) 例えば、R.Rendtorff, *Das überlieferungsgeschichtliche Problem des Pentateuch* (BZAW 147), Berlin/New York 1976 やH.H.Schmid, *Der sogenannte Jahwist, Beobachtungen und Fragen zur Pentateuchforschung*, Zürich 1976があります。後者を以下でH.H.Schmid, *Jahwist*と引用。
- 5) E.Otto, *Stehen wir vor einem Umbruch in der Pentateuchkritik?*, VuF 22 (1977) S.82-97; J.van Seters, *Recent Studies on the Pentateuch. A Crisis in Methods*, JAOS 99 (1979), pp.663-673; H.H.Schmid, *Auf der Suche nach neuen Perspektiven für die Pentateuchforschung*, Congress Volume Vienna (VTS 32) 1981, S.375-394; E.Zenger, *Wo steht die Pentateuchforschung heute?*, BZ 24 (1980), S.101-116; *Auf der Suche nach einem Weg aus der Pentateuchkrise*, ThRv 78 (1982), S.353-362; H.Ch.Schmitt, *Die Hintergründe der neuesten Pentateuchkritik*, ZAW 97 (1985), S.161-179; A.H.J.Gunneweg, *Anmerkungen und Anfragen zur neueren Pentateuchforschung*, ThR 48 (1983), S.227-253; ThR 50 (1985), S.107-131.
- 6) F.W.Nicholson, *The Pentateuch in Recent Research. A Time for Caution*, Congress Volume Lauvain 1989 (VTS 43), Leiden 1991, pp.10-21.
- 7) 神名についてはF.Kohata, *Jahwist und Priesterschrift in Exodus 3-14* (BZAW 166), Berlin/New York 1986, S.16を参照。特に編集者は、二つの文書の両方の神名を使っているので、事情が複雑になります。それにたいし、重複は、編集者など文書より後の人がわざわざ作りだしたとは考えに

くいので、編集者を考慮に入れても、ほとんど変化しません。

- 8) W.H.Schmidt, *Elementare Erwägungen zur Quellenscheidung im Pentateuch*, Congress Volume Lauvain 1989 (VTS 43), Leiden 1991, S.22-45 とくにS.39; O. Kaiser, *Grundriß der Einleitung in die kanonischen und deuterokanonischen Schriften des Alten Testaments*, Bd 1, Gütersloh 1992, S.50を参照。後者を以下でO.Kaiser, *Grundriß* と引用。
- 9) 後述21頁以下。
- 10) 例えば出エジプト記14章の海の奇跡の物語の編集を問うのに、エローヒストによる部分のごく僅かであって、しかもヤハウイストにいわば付着した形なので、Eが独立した文書であったのかそれともJへの編集的加工だったのかは不問にしておけます。
- 11) 五書のごく小さな一部を記したものが発見され、1986年に公表されました。エルサレムのヒンノムの谷の南側の斜面の墓の中から、お守りだったらしい銀箔の巻いたものが出てきたのです。時代は考古学上の理由から前7世紀頃と決定されました。しかしこれによってその時代に五書ないし文書資料が存在していたことが証明されたことにはなりません。なぜなら、そこに記されていたのは、いわゆるアロンの祝福(民6:24-26)であり、これは文書資料の著者によって創作されたものではなく、書き記される以前に、古くからすでに人々の間でよく知られ、暗唱されていた句である(M.Noth, *Das vierte Buch Mose/Numeri* (ATD 7), 2.Aufl., Göttingen, 1973, S.53)からです。この考古学上の発見については、G.Barkay, *Keter Hinnom. A Treasure Facing Jerusalem Walls*, *The Israel Museum Catalogue* 274 (1986); R.Riesner, *Der Priestersegen aus dem Hinnom-Tal*, *Theologische Beiträge* 18 (1987), S.104-108、私の「書評への応答」【日本の神学】28巻、日本基督教学会、1989年、71-74頁所収、とくに73頁を参照。

- 12) M.Nothの膨大な文献研究は彼の歴史家としての関心、文献をどのようにして史料として用いるか、によって貫かれています。彼の五書の伝承史の研究が、「展望：歴史的諸帰結」(M.Noth, Überlieferungsgeschichte des Pentateuch, 2.Aufl., Stuttgart 1961, S.272以下)で終わっているのもそれをよく示しています。以下でこれをM.Noth, Überlieferungsgeschichteと引用。
- 13) ただし Ch.Levin, Der Jahwist (FRLANT 157), Göttingen 1993, S.395-396 は否定の後で新しい歴史像を提示するということはしていません。
- 14) 注4と注30を参照。
- 15) R.Albertz, Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit (ATD Ergänzungsreihe 8), 2 Bde., Göttingen 1992. これへの批判的書評をW.Thiel, ThLZ 119 (1994), Sp.3-14 が書いています。他の分野ではテキストを宗教史の史料として用いるのに慎重なR.Albertzが、こと五書に関しては無批判、無条件にE.Blumの成立史に依っていると指摘がなされています(Sp.4.12)。
- 16) H.Paulsen, Traditionsgeschichtliche Methode und religionsgeschichtliche Schule, ZThK 75 (1978), S.20-55 を参照。
- 17) W.Klatt, Hermann Gunkel (FRLANT 100), Göttingen 1969, S.150; F.Kohata, BZAW 166, S.11-12; O.Kaiser, Grundriß, S.34.
- 18) その典型がJ.van Setersです。彼は、文書化される以前の伝承の歴史を根拠なきものとしてはっきり拒否します(J.van Seters, Abraham, pp.311-312)。しかしその彼のテキストの扱いが、いかに問題をはらむものであるかについては、注38を参照。
- 19) そのさい問題なのは、口伝か文書化したものかというより、むしろ文言が定まっていたかどうかです。書かれた材料の一例である Protojahwist は後(27-28頁)でとりあげます。

- 20) H.Gunkel, *Schöpfung und Chaos in Urzeit und Endzeit*, Göttingen 1895, S.58  
Anm.2.
- 21) 「独立」はselbständigの訳で、unabhängigではありません。後者ならある文書の著者が他の文書を知らなかったという、文書間の関係を規定するものとなります。
- 22) このふたつはそれぞれの文書で使われている神の名に基づく名称です。
- 23) これは複数の名称を神に用いているので、それから文書の名称を作ることができず、著者が祭司であると推定されることによりこう呼ばれます。
- 24) このJehowistはヤハウイスト(Jahwist)の子音にエローヒスト(Elohist)の母音をつけて合成されました。
- 25) この名称のもつ問題性については20頁を参照。
- 26) あるいは "der üblicherweise als Pentateuchredaktor R<sup>p</sup> bezeichnete Bearbeiter", O.Kaiser, *Der Gott des Alten Testaments. Theologie des AT 1: Grundlegung* (UTB 1747), Göttingen 1993, S.162. ドイツ語の場合同じ語をくり返すのを文体上非常に嫌うので、ひとつのものを指して複数の語を使うのも用語混乱の一因でしょう。
- 27) しかしR.Smend, *Ein halbes Jahrhundert alttestamentliche Einleitungswissenschaft*, ThR 49 (1984), S.3-30とくにS.15-16によれば、正典としての聖書に関心の中心を置くB.S.ChildsのIntroduction to the Old Testament as Scripture, London/Philadelphia 1979 は、旧約各書の成立史を取り上げはするが、いい加減な気持ちで(mit halbem Herzen)しているだけです。
- 28) R.N.Whybray, *The Making of the Pentateuch. A Methodological Study* (JSOT Suppl 53), Sheffield 1987.彼の五書研究はヨセフ物語から出発し

- ており、すでに1968年にThe Joseph story and Pentateuchal Criticism, VT 18 (1968), pp.522-528 という論文を書いています。
- 29) J.A.Emerton, VT 39 (1989), pp.110-116を参照。
- 30) E.Blum, Die Komposition der Vätergeschichte (WMANT 57), Neukirchen 1984; Studien zur Komposition des Pentateuch (BZAW 189), Berlin/New York 1990. 前者は564頁、後者は433頁と大部です。序文によると後者が教授資格論文として提出されたのは1988年夏学期、書かれたのは主に1983~1984年です。
- 31) R.Rendtorff, VTS 28 (上記注3); BZAW 147 (上記注4)。
- 32) Ch.Levin, op. sit. (上記注13)。
- 33) E.Blum, BZAW 189, S.9.11.26 等。
- 34) Drama, Dramatik, Dramaturgie, die dramatische Geschlossenheit, dramaturgische Ausgestaltung, Entscheidungs-drama とドラマに関する語が種々登場します(E.Blum, BZAW 189, S.9-17)。
- 35) E.Blum, BZAW 189, S.18-19.
- 36) die priesterliche Kompositionの略号がKPなのは当然ですが、die vorpriesterliche Kompositionの略号がKDなのは、deuteronomistisch からその頭文字のDを取ったからです。
- 37) H.H.Schmid, Jahwist; M.Rose, Deuteronomist und Jahwist. Untersuchungen zu den Berührungspunkten beider Literaturwerke (AThANT 67), Zürich 1981; F.V.Winnett, Re-Examining the Foundations, JBL 84 (1965), pp.1-19; J.van Seters, Abraham. しかしF.W.Winnettらのヤハウイストの問題性については14-15 頁を参照。
- 38) しかし無条件に賛成することがひとつあります。それはJ.van Setersの文献批判研究を「全く勝手なやり方で」(eigenwillig)という語をくり返し用いて、徹底的に批判していることです(E.Blum, BZAW 189, S.39

Anm.149)。私も以前J.van Setersの諸論文(上記研究以外にThe Place of the Jahwist in the History of Passover and Massot, ZAW 95 [1983], pp.167-182; The Plague of Egypt. Ancient Tradition or Literary Invention, ZAW 98 [1986], pp.31-39)を読んで、文献批判研究の基本的センスが全然ないのに驚かされました。Van Seters への否定的評価については大野恵正「シナイ伝承の研究—序説—」【活水論文集】第37集、活水女子大学・短期大学、1994年、1-24頁所収、とくに18頁をも参照。

39) 15頁以下を参照。

40) E.Blum, BZAW 189, S.22-28で出3章について論じられている。しかし、① 4節で、同じ主語であれば「叫ぶ」という動詞だけですむはずなのに、主語が二度とも挙げられている。2節の「茨の灌木」(ハッセネー)を例にひき、このくり返しは強調のためであると主張するが、2節の方は名詞文であり、動詞文である4節にはあてはまらない。4b節のエローヒームが6b節のハエローヒームとInclusioになっているというが、4節冒頭でなくてはInclusioにならない。だから4節の神名の交替はやはり奇異なこととして残る。② 7-8節と9-10節はひとつつながりでない。なぜなら、重複があり、ひとつの事柄にふたつの異なる表現があり、7-10節をひと続きとするなら、9節の「イスラエルの叫びが上ってきて…」は7節より前になくては順序に合わない。③ 複数の文書資料があれば、編集者の存在が当然想定されるという、すでに100年前から指摘されていること(H.Holzinger, Exodus, KHC 2, Tübingen 1900, S.8; B.Baentsch, Exodus-Leviticus-Numeri (HK 1.2.1), Göttingen 1900, S.19; M.Noth, Das zweite Buch Mose/Exodus (ATD 5), 3.Aufl., Göttingen 1965, S.17; W.Richter, Die sogenannten vorprophetischen Berufungsberichte. Eine literaturwissenschaftliche Studie zu 1 Sam 9,1-10,16, Ex 3f. und Ri 6,11b-17 (FRLANT 101), Göttingen 1970, S.66; W.H.Schmidt, Exodus, BK 2/1,

Neukirchen 1988, S.122; F.Kohata, BZAW 166, S.18 Anm.29) を無視して、4b節の「灌木の中から…」が宙に浮いているなどと言う。

- 41) 例えば出3章の分析(E.Blum, BZAW 189, S.22-28)において。
- 42) E.Blum, BZAW 189, S.221.
- 43) その他にも、次のような疑問があります。内実の異なる二つの作業を同じKompositionという語で括ることができるのだろうか。つまり、第一のKDは、ばらばらの伝承をつなぐことが主な作業であり、このさいの加筆は少ないが、それにたいし二番目のKPはすでにまとまったものに加工するのだから、新しい大きな段落を加えたりもして、その加筆の量は第一のに比べ、格段に多いのです(E.Blum, BZAW 189, S.27.222 Anm.4.224)。
- 44) 注4と注30に挙げた両者の著作の題を比較のこと。
- 45) F.V.Winnett, op.cit.(上記注37)これはJ.van Setersの諸研究の基礎となり、また以下に述べるその成立史におけるヤハウイストの分割や、文書資料に代わって加工者に大きな意義を認めることなどによってドイツ語圏の五書研究にも (H.Ch.Schmitt, Die nichtpriesterliche Josephsgeschichte (BZAW 154), Berlin/New York 1980やヤハウイストの書き継ぎ説や E.Blum, WMANT 57; BZAW 189等)影響を与えることになります。
- 46) F.V.Winnett, op.cit., p.18に結果がまとめられています。
- 47) まず一連の話のまとまったものが出発点にあり、その後それに改訂がなされ、そして同時に、かなりの量の話がつけ加えられるということが数回されて出来上がったという点が共通で、誰によって、どの範囲で、そして全体で何回この加工がなされたかでは異なります。
- 48) Ch.Levin, op.cit.(上記注13).ヤハウイストなどいないとか、彼独自の神学などなく、申命記史家に依存している(H.H.Schmid)などの否定的な発言が続いた後の、ひさしぶりの肯定的な発言です。ヤハウイストの

- 存在を端的に肯定するので、題にもH.H.Schmidのように「いわゆる」(sogenannt)は付かず、そのものずばりヤハウリストとなっています。
- 49) J.van Seters, Abrahamは 族長物語、H.Ch.Schmitt, BZAW 154 はヨセフ物語、F.Kohata, BZAW 166 は出エジプト物語、E.Blum, WMANT 57; BZAW 189 は二つの研究あわせて初めて広い範囲を覆っています。
- 50) 例えば、出14:15a $\beta$ は、最終編集者によって10b $\beta$ 節に合わせて加えられたと Ch.Levin, op.cit., S.345-346 は言いますが、しかし動詞は同じ「叫ぶ」でも、前者は単数形であり、後者は複数形で、かみ合わないことはすでにずっと以前から指摘されており (Baentsch, op.cit.[上記注40], S.124)、10b $\beta$ 節に合わせたのなら当然15a $\beta$ 節の動詞も複数形であるはずです。
- 51) 例えば、L.Schmidt, Beobachtungen zu der Plagenerzählung in Exodus 7,14-11,10 (StBib 4), Leiden 1990.
- 52) 例えばB.Baentsch, op.cit.(上記注40).
- 53) 例えばCh.Levin, op.cit. (上記注13), S.48-50に明瞭に見て取れます。
- 54) お祖父さんの方の R.Smend 等の J<sup>1</sup> と J<sup>2</sup>、Eißfeldt の N, Fohrer の L。
- 55) Ch.Levinはこの順序でしていますが、①と②の順序は逆でも同じ結論に至ります。
- 56) そのさいCh.Levinは書かれた資料を考えています。Ch.Levin, op.cit., S.26.389 を参照。
- 57) Ch.Levin, op.cit., S.34.
- 58) 例えば、W.H.Schmidtによって。しかし注解書で取り上げるときは、箇所が限られますし(例えばW.H.Schmidt, BK 2/1, S.120-121)、五書研究全般について論じるときには、原則的、一般的に語ることになってしまいます(W.H.Schmidt-W.Thiel-R.Hanhart, Altes Testament. Grundkurs Theologie I [Urban-Taschen-Bücher 421], Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1989,

S.34)。

- 59) H.Holzinger, *Einleitung in den Hexateuch*, Freiburg i.Br./Leipzig 1893, S.93-110.
- 60) 26-29頁以下。W.Thiel, *ThLZ* 119, Sp.4 Anm.5もCh.Levinがヤハウイストの存在を再確認したことを評価しながら、その年代決定は受け入れられないとの立場を表明しています。
- 61) Ch.Levin, *op.cit.*, テクスト分析(S.80-388)の随所とS.437において。
- 62) M.Lohr, *Untersuchung zum Hexateuchproblem* (BZAW 38), Gießen 1924; P.Volz, *Der Elohist als Erzähler, ein Irrweg der Pentateuchkritik?* (BZAW 63), Gießen 1933.したがってこれは厳密には、「最近」の五書研究の問題ではありません。
- 63) F.V.Winnett, *op.cit.* (上記注37)p.18; F.M.Cross, *Canaanite Myth and Hebrew Epic*, Cambridge Mass. 1973 とくにpp.293以下; J.van Seters, *Abraham*, p.279-295; *JAOS* 99 (1979), pp.663-673; M.Rose, *op.cit.* (上記注37), S.328 Anm.67; E.Blum, *WMANT* 57; *BZAW* 189 (ともに上記注30)。
- 64) そのためK.KochはP - kein Redaktor!, *VT* 37 (1987), S.446-467というひとつの論文を書き、O.H.SteckはPに関する論文の冒頭で短く支持表明をしています *Aufbauprobleme in der Priesterschrift*, in: D.R.Daniels u.a. (Hg.), *Ernten, was man sät. FS K.Koch*, Neukirchen 1991, S.287-308。W.Thiel, *ThLZ* 119, Sp.12 Anm.33 をも参照。
- 65) O.Kaiser, *Einleitung in das Alte Testament*, Gütersloh, 3.Aufl. 1974, S.104-105; 4.Aufl. 1978, S.105-106; 5.Aufl. 1984, S.114.
- 66) O.Kaiser, *TRE* Bd.21, 1991, S.311-314とくにS.313.
- 67) O.Kaiser, *Grundriß*, S.59.
- 68) L.Schmidt, *Studien zur Priesterschrift* (BZAW 214), Berlin/New York 1993; Ch.Levin, *op.cit.* (上記注13), S.437.

- 69) 詳しくはN.Lohfink, *Die Priesterschrift und die Geschichte*, Congress Volume Göttingen 1977 (VTS 29), Leiden 1978, S.189-225 とくにS.199-200; W.H.Schmidt, VTS 43(上記注8), S.22-45; K.Koch, VT 37(上記注64)。日本語では私の「研究ノート」【聖書と教会】1987年5月号。
- 70) P.Volz, op.cit. (上記注62); W.Rudolph, *Der "Elohist" von Exodus bis Josua* (BZAW 68), Berlin 1938.その意味では祭司文書の場合と同様、これは「最近」の問題ではありません。
- 71) H.Ch.Schmitt, BZAW 154 (上記注45).
- 72) Ch.Levin, op.cit, S.437 Anm.6.
- 73) O.Kaiser, *Grundriß*, S.57. エローヒストについて明確な判断を下すには、かなりまとまって出てくる唯一の箇所である創20-22章を本格的に研究しなければなりません。
- 74) 文書仮説では、複数の文書を結びつけた人、断片仮説では、さまざまな断片を集めて連続するものに仕上げた人、補充仮説ではひとつの文書の中に諸断片や別の文書を入れ込んだ人です。
- 75) A.Dillmann, *Die Genesis* (KeH 1, 1), 5.Aufl., Leipzig 1886やB.Baentsch, op.cit. (上記注40)等。
- 76) 一例を挙げれば出3:8。
- 77) 出7:3b; 16:4-5.28-29.31-32; 民14:8。
- 78) R.Smend, *Die Entstehung des Alten Testaments*, 2.Aufl., Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1984, S.38. 以下でR.Smend, *Entstehung* と引用。; W.H.Schmidt, *Plädoyer für die Quellenscheidung*, BZ 32 (1988), S.1-14 とくにS.11-13; O.Kaiser, UTB 1747, S.159.
- 79) O.Kaiser, UTB 1747, S.158.
- 80) O.Kaiserも略語としては、従来どおりこれを使っています。
- 81) 祭司文書が五書を編集したと理解されることもあります。例えば、

- F.V.Winnett, op.cit.(上記注37); p.18、並木浩一「生と死をむすぶもの—旧約聖書における傷」【旧約聖書における社会と人間】、教文館、1982、43-80頁所収、とくに78頁。
- 82) W.Thiel, Genesis 26—eine Segensgeschichte des Jahwisten, in: P.Mommer u.a.(Hg.), Gottes Recht als Lebensraum, FS H.J.Boecker, Neukirchen 1993, S.251-263 とくにS.253は、自分の立場を正確に反映するものとしてR<sup>JEP</sup>を用いています。
- 83) 例えばCh.Levin, op.cit., S.346.
- 84) O.Kaiserからの1993年10月24日付けの手紙でこの二重の意味を確認しました。
- 85) それらの帰属が今問題になっていることについては30頁以下を参照。
- 86) 30頁を参照。
- 87) 順序をさかのぼるのは、(c)神学思想が(d)成立の時と所の後で再び取り上げられるときだけです。
- 88) その理由についてはW.H.Schmidt, Einführung in das Alte Testament, 4.Aufl., Berlin 1989, S.46を参照。
- 89) Th.Nöldeke, Untersuchungen zur Kritik des Alten Testaments, Kiel 1869.
- 90) H.H.Schmid, Jahwist(上記注4).
- 91) H.H.Schmid, Jahwist, S.17.
- 92) R.Smend, Entstehung, S.94 ; F.Kohata, BZAW 166, S.2; Ch.Levin, op.cit., S.30.
- 93) H.H.Schmid, Jahwist, S.17 で明言されています。
- 94) 上記注11を参照。
- 95) つまりここで問題なのは、ある箇所とある箇所の文書としての依存関係であり、共通のモチーフとか伝承による関係ではありません。
- 96) R.Smend, "Das Ende ist gekommen". Ein Amoswort in der Priesterschrift, in:

J.Jeremias u.a.(Hg.), Die Botschaft und die Boten, FS H.W.Wolff, Neukirchen 1981, S.67-72等を参照。

- 97) 自分の時代の問題を作品の中に持ち込むかどうかは、ヤハウィストと祭司文書の著者で随分異なります。これについて私の「出エジプトの神」【聖書セミナー】No.10、日本聖書協会、1994年、1-78頁を参照。
- 98) その一部を時代順に拾います。H.Gunkel, Genesis, 3.Aufl., Göttingen 1910=1966, S.LXXXVIII. XCI; G.von Rad, Das erste Buch Mose/Genesis, ATD 2, 9.Aufl., Göttingen 1972, S.10; M.Noth, Überlieferungsgeschichte, S.248; R.Smend, Entstehung, S.93; H.Seebass, Jahwist, TRE Bd. 16 1987, S.441-451 とくにS.446; Ch.Levin, op.cit.,S.35。しかしレヴィンはその舌の根も乾かないうちにヤハウィストの年代を大胆に断言します。
- 99) この点で関根清三氏のヤハウィストの創造物語の釈義(「エデンの園の物語1)~5)」「新・預言と福音」1~5号、1989年各41-52、24-35、25-37、25-34、25-31頁)は実に賢明ですが、それだけに時代的位置づけが加わっていたら、どうなっていたらと一層興味をひかれます。ただこれは、自分の時代の問題を作品に持ち込む度合いの低いヤハウィストにおいて可能であった釈義なのかも知れません。
- 100) ひとつのことだけでは、それはいろいろな時代に結びつきうるのです。例えば、ヤハウィストの神観のひとつとして、一か所にとどまるのではなく、放浪する人間についてまわる神ということがあり、遊牧的信仰理解と呼ばれます。これをK.BergeとCh.Levin はともに認めます。ところが、それからヤハウィストをどの時代に位置づけるかということでは、両者は大きく異なります。K.Berge, Die Zeit des Jahwisten (BZAW 189),Berlin/New York 1990, S.312-313は遊牧時代に近い所で、王国時代初期、Ch.Levin, op.cit., S.35 Anm.70 は遊牧的信仰が自覚的に取り上げられ、再び生かされた時代ということでディアスポラの時

代とします。

- 101) M.Noth, Überlieferungsgeschichte, S.16.
- 102) H.W.Wolff, Das Kerygma des Jahwisten, EvTh 24 (1965), S.1-19.
- 103) L.Schmidt, Väterverheißungen und Pentateuchfrage, ZAW 104 (1992), S.1-27によれば創12:7; 28:13-14の土地の約束だけが古いものです。しかしある箇所では、すでに19世紀の注解書が、土地の約束が申命記的編集であると指摘しています。創26:3b-5についてA.Dillmann (op.cit. [上記注75], S.317)を参照。そして申命記史家ではまさに土地が重要なテーマのひとつです。
- 104) 各テキストの分析の中のjahwistische Redaktion (J<sup>R</sup>)で挙げられています。
- 105) Ch.Levin, op.cit., S.335-340.
- 106) この相関関係については 31-32 頁を参照。
- 107) R.Smend, Entstehung, S.94.その時代については28-29頁を参照。
- 108) O.Kaiser, Grundriß, S.63.その時代については28-29頁を参照。
- 109) 例えば出10:1b-2、これについてはF.Kohata, BZAW 166, S.120-121を参照、創26:3b-5.24についてはW.Thiel, FS H.J.Boecker(上記注82), S.258 Anm.29を参照。その他あちこちに見られます。Ch.Levin, op.cit., S.436-437をも参照。
- 110) 例えばV.Fritz, Israel in der Wüste. Traditionsgeschichtliche Untersuchung der Wüstenüberlieferung des Jahwisten (MThSt 7), Marburg 1970, S.107 以下。
- 111) Ch.Levin, op.cit., S.430以下。
- 112) V.Fritz, op.cit., S.89をS.25 Anm.6と比較。この事についてはF.Kohata, BZAW 166, S.147を参照。Ch.Levin, op.cit., S.329は出3:1.2b.4b-5をヤハウイストの用いた資料としますが、その中にヤハウイストが好ん

で使う語であるアダマー(大地)が含まれています。

113) Ch.Levin, *op.cit.*, S.429-430.

114) 例えば、海の奇跡と洪水物語とソドムの滅亡に共通なこととして、  
① ヤハウエが滅びを前もって告知する、② ヤハウエは、自分から遠くにいて、イスラエル人に敵対する者を滅ぼすということを指摘し、これらはヤハウイストによって導入されたと判断します(Ch.Levin, *op.cit.*, S.327.341)。①にはこれが当てはまっても、しかし②はいづれの場合もすでに伝承の話の展開がそうなっていたので、これをヤハウイストに帰し、それから彼の神学を導き出すことはできません。同様に、「助けを求める叫びに神が答えて介入する」ということが出エジプトの物語とソドムの物語に共通でも、これがヤハウイストによる新解釈である(Ch.Levin, *op.cit.*, S.341-342)とは言えません。

115) これについての詳細は私の「出エジプトの神」(上記注97)を参照。

116) しかし英語圏では、以前から個々の論文で、ヤハウイストの時代を下げる試みはなされていました。F.V.Winnett, *op.cit.* (上記注37)以前にも J.Morgenstern, *The Mythological Background of Psalm 82*, Hebrew Union College Annual 14, 1939, p.93 n.114.

117) F.V.Winnett, *op.cit.*; Ch.Levin, *op.cit.* 後者は、ヤハウイストははっきりした神学をもって編集作業をしている。したがってヤハウイストは後の時代の者であると言いますが(S.35)、明確な神学を持った思想家が古い時代にいないというのは根拠なき偏見です。

118) J.van Seters, *Abraham*(上記注3); *The Primeval Histories of Greece and Israel Compared*, ZAW 100 (1988), pp.1-12.

119) H.H.Schmid, *Jahwist*; M.Rose, *op.cit.*(上記注37).

120) 例えばCh.Levin, *op.cit.*, S.28-31はH.H.Schmid, *Jahwist*の方法を批判しています。

- 121) J.van Setersのテキストの扱いについての厳しい批判については上記注38を、ギリシャの歴史記述との比較によりヤハウィストを前6世紀半ばに位置づけることへの異論については、E.W.Nicholson, op.cit.(上記注6), S.16-18、H.H.Schmidについては、22-23頁を、Ch.Levinのヤハウィストの作品の範囲決定と、その解釈と、そこからの神学については28頁を参照。
- 122) K.Berge, BZAW 189.
- 123) O.Kaiser, Grundriß, S.65-67.
- 124) W.H.Schmidt, Ein Theologe in salomonischer Zeit? Plädoyer für den Jahwisten, BZ 25 (1981), S 82-102; VTS 43 (上記注8), S,42-42; L.Schmidt, Überlegungen zum Jahwisten, EvTh 37 (1977), S.230-247 とくにS.247; Literarkritik I, TRE 21, S.211-222 とくにS.215; K.Berge, BZAW 189.
- 125) 上記注117~119にあげたもの。日本語の論文として次のがこの問題を扱っています。並木浩一「交わりにおける生」古屋安雄編『なぜキリスト教か』中川秀恭先生八十五歳記念論文集、1993年、325-367頁所収とくに358頁以下を参照。しかしヤハウィストの時代設定のために挙げられている理由は以下のように説得的ではありません。①エゼキエルと共通の生の感覚が理由として挙げられます。しかし。思想の根本にある基本的感覚から時代を論じるには、その基本的感覚がその時代にしかありえないことを示さなくては、時代との関係は論じえません。②アブラハムが捕囚前の文献に出てこないこと。これは沈黙からの論議なので、論拠として弱いです。③ヨセフ物語についての「新しい」研究に基づいてヤハウィストの関与がなかったとされますが、それよりさらに新しい研究(L.Schmidt, Literarische Studien zu Josephsgeschichte [BZAW 167], Berlin/New York 1986)によれば、それはあることとなります。④ダビデ・ソロモン時代ならヤ

- ハウリストが土地取得の叙述を含まないことは問題であると指摘されます。しかし最近のヤハウリストにおける土地問題は、先に(26頁)述べたように別の様相を呈しています。⑤「神の山」をめぐるエゼキエル(28:11-19)と創世記2-3章の関係は、共通の伝承によるものであり、文書間の直接の依存関係ではありません。これについては H.Gunkel, Genesis (上記注98), S.131-132; W.H.Schmidt, Die Schöpfungsgeschichte der Priesterschrift (WMANT 17), 2.Aufl., Neukirchen 1967, S.222; O.H.Steck, Die Paradieserzählung. Eine Auslegung von Genesis 2,4b-3,24 (BS 60), Neukirchen 1970, S.44-45を参照。
- 126) 前者がR.Smend, Entstehung, S.94、後者がO.Kaiser, Grundriß, S.65-67です。
- 127) これはすでにJ.Wellhausen, Prolegomena zur Geschichte Israels, 6.Ausg., Berlin/Leipzig 1927=1981, S.340 が指摘しています。R.Smend, FS H.W.Wolff(上記注96), S.71をも参照。出エジプト物語を中心に考察した両文書資料のこの点における歴然とした違いについては、私の「出エジプトの神」(上記注97)を参照。
- 128) だからヤハウリストの年代の問題について私はまだ態度を決定していません。それで学位論文(BZAW 166)で、H.H.Schmidによる災禍物語の時代的位置づけの議論を検討した結果、それに賛成しないということ以外に何も言わずにいたら、O.Kaiser(Grundriß, S.66 Anm.36)にヤハウリストを後代に位置づけることへの反論を提出していないと指摘されてしまいました。しかしこれは意識的にしたことです。なぜなら学位論文はヤハウリストと祭司文書の関係がテーマだったので、ヤハウリストが祭司文書より古いということでもと足りたからです。
- 129) O.Kaiser, Grundriß, S.72.

- 130) N.Lohfink, op.cit.(上記注69), S.198 Anm.29.
- 131) J.L.Ska, Les plaies d'Égypte dans le récit sacerdotal (P<sup>s</sup>), Bib 60 (1979), p.23-35 とくにp.34.
- 132) 理由はF.Kohata, BZAW 166, S.307-308で論じました。最近の祭司文書研究であるK.Grünwaldt, Exil und Identität (BBB 85), 1992, S.76 も N.Lohfinkのこの説に反対です。
- 133) L.Perlitt, Priesterschrift im Deuteronomium?, ZAW 100 (1988), S.65-88; E.Aurelius, Der Fürbitter Israels. Eine Studie zum Mosebild im Alten Testament, CB.OT 27 (1988); Ph.Stoellger, Deuteronomium 34 ohne Priesterschrift, ZAW 105 (1993), S.27-51. 前者二つへの批判については L.Schmidt, Studien zur Priesterschrift (BZAW 214), Berlin/New York 1993, S.160 Anm.333. 207を参照。申34のモーセの死の記事とそれまでの祭司文書とのつながりについてはW. H. Schmidt, Magie und Gotteswort. Einsichten und Ausdrucksweisen des Deuteronomiums in der Priesterschrift, in: I. Kottsieper u. a. (Hg.) >Wer ist wie du, HERR, unter den Göttern? < FS O. Kaiser, 1994, S. 169-179とくにS. 173-176を参照。
- 134) K.Grünwaldt, op.cit.もこれらの層を確認し、それらの層とさらにP<sup>s</sup>以後の編集ないし加工において、割礼、過ぎ越し、安息日という三つの制度(Institutionen)がどのようにその都度解釈し直されているかを究明しています。
- 135) K.Grünwaldt, op.cit., S.221.
- 136) R.Smend, Entstehung, S.58-59; Ch.Levin, op.cit., S.434-435も、ヤハウイストとならぶ祭司文書のような大きな作品の成立の背後にはエルサレムの聖所の特別な位置があるという別の理由から、成立場所としてエルサレムを挙げます。
- 137) B.Janowski, "Ich will in eurer Mitte wohnen", JBTh 2 (1987), S.164-193;

- Tempel und Schöpfung, JBTh 5 (1990), S.37-69; M Köckert, Leben in Gottes Gegenwart. Zum Verständnis des Gesetzes in der priesterschriftlichen Literatur, JBTh 4 (1989), S.29-61.
- 138) H.Ch.Schmitt, "Priesterliches" und "prophetisches" Geschichtsverständnis in der Meerwundererzählung Ex 13,17-14,31, in: A. Gunneweg u.a.(Hg.), Textgemäß, FS E.Würthwein, 1979, S.139-155.この論文が今のテキストの構造分析から祭司文書と編集の歴史理解を導き出そうとする方法への批判については、F.Kohata, Die Endredaktion (R<sup>P</sup>) der Meerwundererzählung, AJBI 14 (1988), S.10-37 を参照。O.Kaiser, UTB 1747, S.162.
- 139) A.Dillmann(上記注75)やB.Baentsch(上記注40)の注解書を参照。
- 140) E.Sellin-L.Rost, Einleitung in das Alte Testament, 9.Aufl., Berlin 1959, S.73-75; G.Fohrer, Einleitung in das Alte Testament, 10.Aufl., Heidelberg 1965, S.207-209; O.Eißfeldt, Hexateuch-Synopse, Darmstadt 1962, S.89以下と109以下もL, J, E, Pという4つの欄を設けているだけです。しかしM.Noth, Überlieferungsgeschichte, S.16では編集者が顧みられています。研究史における編集の動向は、もっと調べなければなりません。これはもしかするとある時期の五書研究の硬直化と関連しているかも知れず、研究史のおもしろいテーマになる可能性があります。
- 141) W.Fuss, Die deuteronomistische Pentateuchredaktion in Exodus 3-17 (BZAW 126), Berlin/New York 1972とA. Reichert, Der Jehowist und die sogenannten deuteronomistischen Erweiterungen im Buch Exodus, Dissertation Tübingen 1972がその始まりです。
- 142) 例えば、L.Schmidt, StBib 4 (上記注51)では、ヤハウィストのテキストが減り、エホヴィストのテキストが増えています。しかし彼はあまりに多量のテキストをエホヴィストのものとしすぎるとW.H. Schmidtが書評で批判しています (ThLZ 119 [1994] Sp. 124-127 とくに

Sp.126)。

- 143) A.Schart, *Mose und Israel im Konflikt. Eine redaktionsgeschichtliche Studie zu den Wüstenerzählungen* (OBO 98), Freiburg/Göttingen 1990.彼は、ヤハウイストと祭司文書は文書資料であり、エローヒストはヤハウイストへの補いであると理解しています。
- 144) その方法の適用は祭司文書に関してのみ、それもごく僅かになされるだけです。つまり、方法論的考察と実際の釈義が対応していません。くわしくはこの本についての書評F.Kohata, *Bib* 73 (1992), S.412-416を参照。
- 145) Ch.Levin, *op.cit.*(上記注13), S.327.341.411-412.419.